

## 願文にひそむ俗文学

—「江都督納言願文集」を中心として—

The popular literature that lies behind of Ganbun

王 暁 平

Wang, Xiao-ping

「暮年詩記」（『本朝續文粹』卷十一および『朝野群載』卷三所収）は、大江匡房の晩年における自撰詩集に付された、その来歴を述べる文であるが、幼少頃のことから筆を起し、晩年に至るまでの自己の詩人としての生涯を概観した自伝の体裁を持っている。その中には、自分の願文について次のように述べていた。

前肥後守時綱朝臣深得詩心。見予「前大相国表」並「源右相府室家源二位願文」  
曰：「殆近江吏部文章」。

故伊賀守孝言朝臣、掃部頭佐国提携於文、浮沈於道。蓋後進之領袖也。見予「円徳院願文」

並「前大相国関白第三表」、深感嘆。

何況風騷之道、識者鮮焉。巧心拙目、古人所傷。

前肥後守時綱朝臣は深く詩心を得り。予が「前大相国の表」並び「源右相府室家源二位願文」を見て曰く、「殆ど江吏部の文章に近し」と。

故伊賀守孝言朝臣、掃部頭佐国は文に提携し、道に浮沈す。蓋し後進の領袖なり。予が「円徳院願文」並びに「前大相国の関白第三表」を見て深く感嘆す。

何ぞ況むや風騷の道、識る者鮮きをや。巧心拙目は古人の傷む所なり。

こうして見ると、匡房の考えでは、深い詩心がなければ、願文をよく理解することは困難であるのだろう。なぜなら、願文も「風騷の道」の一つであるからである。つまり、願文の中に文学性或いは詩性があるに違いない。少なくとも、願文が詩賦と同一であることは過言ではない。場合によっては、詩賦以上に重要視されていることは事実であった。

現代の中国文学史の研究者たちは、古代から中国の文学をいろいろ研究した際、さまざまな文体を学んだけれども、願文における文学性または詩性ということはよくわからず、あるいはわかろうとはしなかった。『敦煌願文集』に270首余りの敦煌で発見された願文が収録されているが、

現在出版されている中国文学史のなかに「願文」という言葉さえ見られない。

匡房の願文に影響を与えた中国の典籍は何かということになると、史書や伝奇小説などからとるのが通説のようである。今、筆者はこの点に関して、いささかの疑問をいだいて、『江都督納言願文集』（1）に影響を与えた中国の典籍を探り、特に六朝から趙宋までの俗文学の範囲を考えて、試論を述べてみたい。これはこの小論の目的である。

## 俗 語

匡房の願文には、六朝から唐までの典籍を縦横に引用している。彼の学識が漢学、詩学に通じており、彼の願文を読むと、仏教を学び、志怪小説、伝奇小説及び類書等の学に通通していたことがわかる。仏典を引き、『蒙求』や中国の史書や野史を引用して、浄土往生の願いを述べている点は、内典、外典を駆使して博識ぶりを示している。

まず、『江都督納言願文集』における六朝以来使用され始めた俗語について検討してみよう。

一、屈。屈とは、招き、招く、招待する、招請する、招へいする。蔣礼鴻氏は、『敦煌変文字義通釈』（2）の中で「屈」は招請する、の意といい、変文や講経文や六朝の小説などはその例として挙げている。「屈」の文字は、『江都督納言願文集』に「囁」とあるが、それは「屈」と同じく、六朝の小説や変文にあるものと非常によく似ている。梁の顧野王の『大広益会玉篇』には、「囁、古兀切、憂也」とあるが（3）、次の願文の「囁」は、「憂う」の意ではなく、「招請」の意であることはあきらかである。

囁入道親王為大阿闍梨	入道親王を囁め大闍梨と為し
聊設瑜伽秘密之道場	聊に瑜伽秘密の道場を設す

（巻二、「一品宮仁和寺御堂供養願文」）

囁二十之緇徒	二十の緇徒を囁め
遂供養之素志	供養の素志を遂げる

（巻五、「右府室為亡皇后被供養堂願文」）

囁二十之緇徒	二十の緇徒を囁め
展供養之誦筵	供養の誦筵を展す

（巻三、「于安楽寺被供養大般若経願文」）

囁廿之緇徒	廿の緇徒を囁め
遂二世之素念	二世の素念を遂げる

（巻六、「右大弁長忠」）

敬唄五十之禪侶  
聊展清浄之齋筵

敬に五十の僧侶を唄め  
聊に清浄の齋筵を展す

(巻四、「安楽寺内満願寺願文」)

その例は多数にのぼるが、その語は後世になると盛んに用いられている。建保4年5月28日二品道助法親王の願文に、同様の表現が見える。

方今、卜蕤賓之下句 方今、蕤賓の下句を卜し  
唄紫侶之上徳 紫侶の上徳を唄め(4)

二、耶嬢。『敦煌変文校注』に頻出する俗語に「耶嬢」がある。耶嬢とは、父母の意。『敦煌変文校注』巻一「伍子胥変文」：「曠大劫来有何罪、如今孤負阿耶嬢」(曠大たる劫が来て何の罪が有るか、今父母を背いている)などがある。(5)「阿耶嬢」の「阿」は接頭辞であることは周知の所であろう。

『江都督納言願文集』において、次の二例が検索できるが、更に増えるかも知れない。いずれも「父母」の意である。

誠自襴褌 誠に襴褌より  
恩過耶嬢 恩は耶嬢を過ぎ

(巻三「土御門右大臣宇治御宝供養」)

弟子耶嬢共老 弟子の耶嬢は共に老になり  
旦暮難知。 旦も暮れも知り難い

(巻六「為孝子千日誦」)

三、阿誰。阿誰とは、疑問人称代名詞で、誰と同じ。魏耕原『全唐詩語詞通釈』(6)を参照。漢楽府「十五從軍征」：「道逢郷里人：家中有阿誰？」(道で郷里の人に逢う、「家中誰か有る。)」『敦煌変文校注』巻二「盧山遠公話」：「山神曰：今日阿誰当直？」(山神曰く：今日誰が当番か)『王梵志詩』「先因崇福德」：「改頭換却面、知作阿誰来？」(頭を改えし面を換却せば、誰が来るのを知るのか)(7)。日本の江戸時代の無著道忠の著書である『葛藤語箋』は『孔氏雜説』を引用して、「所謂阿誰、三国時代已有此語」といい、歴統の伝(蜀志巻七)から、次の文章を引用している。「向者之論、阿誰為失。」(「失」を『葛藤語箋』では「是」としているが不可)(8)。

『江都督納言願文集』においては、次のようなものを挙げれば、説明するまでもあるまい。

瓊戸花玉梅雪 瓊の戸や花の玉や梅の雪を  
昔不令他人先看 昔、他人に先に見せなし  
池蓮夏宮槐秋 池の蓮や夏の宮や槐の秋を  
今亦與阿誰共翫 今、誰と共に遊ぶか

(卷二、「円徳院供養願文」)

四、箇中とは、此中、この中。唐代の俗語詩人である寒山の言葉が思い出される。『寒山詩』には「識らず箇中の意を、境を逐うて乱れて紛紛たり」(「世に聡明の士有り」)、「若し箇中の意を得ば、縦横処処に通ず」(「余は諸もろの稚子に勧む」)が見えるが、「這箇意」と同じく本心、本性である(9)。日本の江戸時代の著書である『詩語解』卷下によると、「箇中」は「此中と同じである」としているし、『助語審象』では「就中」と同じであるとしている。「此中」と「就中」は唐詩では多用されるが、いずれも「ここ」の意である。『江都督納言願文集』では一例のみである。

娛樂只在箇此(此、衍文)中 娛樂は只だこの中のみに在す  
栄花何求其外 栄花は何ぞ外に求めん

(卷二、「前女道(子)九條堂供養願文」)

五、肥。肥とは、ゆたか、の意。『易』の「遯」：肥遯。『釋文』：肥、饒裕。『江都督納言願文集』における字は「肥」とあるが、これは「肥」の俗字である。『干祿字書』「平聲」：肥、肥；上通下正。(10) いま、『江都督納言願文集』の用例を挙げると、以下の如くである。

国富民肥 国が肥し、民が肥し  
乃是鎮護之素懷也 乃ち鎮護の素懷なり  
人利年稔 人が利し、年が稔し  
豈明神之冥助哉 豈に明神の冥助とせんや

(卷一「八幡御塔」)

国肥家肥 国が肥し、家が肥し、  
惟人(之)幸也 人の幸なりと惟ふ  
風若雨若 風が若し、雨が若し、  
亦時之和也 亦時の和なり

(卷一「同院北斗曼荼羅堂」)

六、争将。争将とは、怎将。争、いかでか。いかで、どうして。句末に「や」の助詞を伴って反語の意を表す語。「怎」に同じ。『詩詞曲語辞彙釈』で、張相氏は「争、猶怎也。自来謂宋人用怎字、唐人只用争字」と述べているが、『江都督納言願文集』には、次の例があるだけである。

若不修一善 若し一善を修めずんば  
争将脱三途 いかで将に三途を脱さんとすや

(卷六。「美濃前司知房願文」)

七、乞漿得酒。乞漿得酒とは、『遊仙窟』に「漿を乞うて酒を得たるは、舊来神口、兔を打ってくじかを得るは、意の望む所に非ず」(11) という句があるのを利用したものと指摘されて

いる。『江都督納言願文集』には、次のような例を見出すことができる。

行文優武	文を行い武を優にして
乞漿得酒	漿を乞うて酒を得たる

(巻一、「于眞言寺被造立多宝塔願文」)

八、呑刀。呑刀とは、刀を呑むこと、心の痛みの譬えである。『遊仙窟』に張生が十娘に送った恋文の中の一節「未曾飲炭、腸熱如燒、不憶呑刀、腹穿似割（炭火を飲んでいないのに腸は焼けるように熱く、刀を飲みこんでいないのに腹が裂かれるように痛みます）」が見られる。『江都督納言願文集』の例もその意で使用される。

恋慕彌深	恋慕彌に深く
胸忽忽尔似呑刀。	胸忽忽として刀を呑む如き

(巻六、「源中將願文」)

九、察隻。察隻とは、『大漢和辞典』によると、「賢くて雙ぶ者がのいないこと」と説明している。「察隻子」について、「唐の李質の賢才が、当世に並ぶものの無かったのを称した語。『墨莊漫録』巻三：班行李質、人材魁岸、磊落甚偉。徽廟朝、欲求一人相称者為对、竟無可儷。當時同列目為察隻子。京師俚語、謂無对者為察隻」と解釈している。これに対して、『漢語大詞典』には、同じ例文を引いているが、「宋代方言。当世無雙獨一無二之意。」と言っている。「察隻」が、京師、つまり首都の方言であることはわかるが、唐の首都は長安で、北宋の首都は開封で、南宋の首都は臨安である。「察隻」はといった唐の方言であろうか、それども、宋の方言であろうか。実は、『墨莊漫録』は宋の張邦基の作品である。『宋史』巻三五「張康国伝」と『墨莊漫録』の序によると、建炎元年（1127）、張邦基は揚州に閑居し、藏書が好きで、その住居を墨莊と名付けた。『墨莊漫録』によると、李質は建炎三年（1129）に樞殿帥に登用された（12）。唐の時代の人ではないことがわかった。

それに、上引の例文によっても、「察隻」が「徽廟朝」、つまり宋の徽宗（1101—1125年在位）の時の開封の方言であることは一目瞭然なのである。

匡房は、この開封の方言を用いて「花牋」（料紙）の素晴らしさを形容している。

為寫白氏之文集	白氏の文集を写す為に
新儲察隻之花牋	新たに察隻の花牋を儲ける

(巻五「奉為故博陰殿室被供養自筆法花經願文」)

『墨莊漫録』は宋の時代のほかの書物に見られない。このことから、この本は広く流行していなかったと思う。李劍国氏の考証によると、この本は紹興18年（1148）以後に作られたと推定されるが、匡房のこの願文は嘉承3年（1108）6月28日作られて、前関白後二条師通の十周忌における追善願文で、『墨莊漫録』の刊行の40年前のことであった（13）。こうしてみると、この『察隻』は『墨莊漫録』から引用された可能性がなく、それが、いつごろ、どんな書物に記されてい

たのか、如何なる経過を辿って匡房の目にとまっていたのか、また匡房はどのようにそれを理解したのか、などはなお未詳であるが、匡房の願文には、この開封の方言が使用されていることを注目しておきたい。

## 詩 語

周知のごとく、唐代の歌謡で注目すべきは三言二句の形式である。三言が特別な重要性をもっていることは敦煌の歌謡によって明白となった。これは唐代文人の詩中にもしばしば見られるが、俗文学ではよくあらわれる。このような三言二句の形式は、匡房の願文にも見えるが、それは唐代の民間形式及びその影響を受けた文人の詩歌の形式を取り入れたことを示す。

一、三言俗語。『江都督納言願文集』に、次のような句が見出せる。

厭波焉、厭湖焉	波を厭い、潮を厭い
誰藏龍宮之庭	誰か龍宮の庭に藏すや
不怕風、不怕雨	風も怕らず、雨も怕らず
如張祇園之虚	祇園の虚を張るの如き

(卷一、「七十二代同院金泥一切経供養願文」)

「不怕風、不怕雨」(風に負けず、雨に負けず)という句は、唐宋時代の俗語ばかりでなく、今の中国人誰にでもわかる現代俗語である。現代中国語の「怕」と同じ用法の「怕」は、詩文においては六朝から使用されはじめたものと考えられる。

「怕」、玄奘の『衆経音義』に「経文作怕。匹白反。憚怕也。此俗音普嫁反」とある。「怕」が、怖いと思う、おそれるという意味を表すのはかなり遅いようであり、晋の時代以後、初めて文獻に見られる。例えば、「長干曲」に「逆浪故相邀、菱舟不怕揺」があるが、隋の時代以後、次第に白話の文章の中の常用語になってきた。『敦煌変文校注』巻五「無常経講経文」：「怕见人、擬求屬、皴却兩眉難敦触」の「怕」はそれである(14)。『江都督納言願文集』に、「怕」のもう一つの用例があるが、同じ意味である。

道怕赤脛	道 赤脛を怕し
年又黄牙	年 又黄牙になり

(卷三、「祭主願文未出」)

二、三言喩語。

今鬢髮既衰	今鬢髮既に衰にして
三分雲、三分雪	三分の雪なり、三分の雲なり
顔色尽変	顔色盡に変にして
壮年桃、暮年梨。	壮年の桃なり、暮年の梨なり

(卷六、「上野前司逆修」)

雲も雪も白いものである。「三分雲、三分雪」は、鬢がしらが交りのこと。「壮年桃、暮年梨」は、壮年は桃の花のような若々しくて赤く、年寄りになると、顔に斑点を生じて、凍った梨のように衰弱して青白くなること。いずれも分かり易くユーモラスな表現である。哀傷文学としての願文の中にこのようなしゃれを飛ばす言葉を使用していることは、多少違和感を感じさせるかもしれない。

三、重言三言。「重言+一言（名詞）」の形式。重言という表現は、『詩経』や初期の五言詩にはよく見られるが、唐の時代の民間歌謡にも数多く存在した。その一例として敦煌歌辞の「菩薩蠻 溪辺舞」（迭字体）を挙げよう。

霏霏点点廻塘雨	霏霏たる点点たる廻塘の雨
双双隻隻鴛鴦語	双双たる隻隻たる鴛鴦の語 <sup>19</sup>
灼灼野花香	灼灼として野花が香る
依依金柳黄	依依として金柳が黄

盈盈江上女	盈盈たる江上の女
兩兩溪辺舞	兩兩として溪辺に舞う
皎皎綺羅光	皎皎たる綺羅の光
輕輕雲粉装（15）	輕輕として雲粉の装

用字の洗練が巧みな匡房は、重言の音楽性に精通していた。

朧朧月、漫漫風	朧朧たる月、漫漫たる風
風月之席長卷	風月の席が長く巻き
琴琴石、瑟瑟水	琴琴たる石、瑟瑟たる水
水石之地漸荒	水石の地が漸に荒る

（卷一、「同院舊臣結縁経願文」）

四、三言。「重言+然」や「重言+尔」の形式。尔や然、形容の辞。先秦の文献にはこのような表現で表情、様子、情緒などを形容する。『莊子』の「田子方」第二十一に「有一史後至、僮僮不趨、受揖不立、因之舍（一史の後れて至る者有り、僮僮然として趨らず、揖を受けて立たず、因りて舍に之く）」の「僮僮然」はその一例であり、ゆったりした表情、悠悠としておちついたさま、の意。匡房もこのような表現で悲しみ、痛み、不安な気持ちを形容する。

恋慕彌深	恋慕が彌に深く
胸忽忽尔似吞刀	胸忽忽として刀を吞むの如き
歲月漸改	歲月が漸に改えし
心摇摇然如懸旆	心摇摇として旆を懸けるの如き

（卷六「源中将願文」）

忽忽、失意のさま。揺揺、ゆれ動くさま、落ち着かぬさま。「忽忽+尔」や「揺揺+然」によって、形容の意を強化していた。懸旆、垂れさがった旗、心が動揺して定まらない譬え。『隋書』「文学傳」：「迴輪常自轉、懸旆不堪招」。懸旆も懸旆と同じく、心が動揺して定まらない譬えである。『戦国策』「楚策」：「心揺揺如懸旆、而無所終薄（心揺揺として懸旆の如く、而うして終に薄まる所無し）」。匡房の願文の以上の句はこれをふまえて華麗な対句になるばかりでなく、「重言+然（尔）」の表現で新奇さを追求しようとしている。

五、三字連文の挿入。三字連文というのは三つの同義あるいは意味の近い字（単音詞）が並列した複合詞を指している。これは先秦の古漢語や漢魏六朝の中古漢語や唐宋の近代漢語にしか見られないが、中古漢語にもっともよく見かける。この時期に、三字連文が主に漢訳経典などの俗語的な文獻に応用されるので、中古漢語俗語文法の重要な標示の一つと言えよう（16）。たとえば、『敦煌変文校注』「降魔変文」に

適看布金事已了	適に布金は事が已に了したを看て
是以如今還卻帰	是を以て還って卻り帰る（17）

とある。後句の還、卻、帰は同義なので、還卻帰が三字連文であるのは言うまでもない。

『遊仙窟』に似ている表現もある。

含嬌窈窕迎前出	嬌を含みて窈窕として迎へて前み出で
忍咲婆娑返卻廻	咲ひを忍んで婆娑として返つて卻り廻る

句中の返、卻、廻という三字も三字連文である。

匡房の願文における三字連文をみよう。

願改小年艷艷綾羅錦之装	願ら小年の艷艷たる綾羅錦の装を改えす
将救長夜冥冥火血刀之苦	将に長夜の冥冥たる火血刀の苦を救う
	（卷五「定子天王寺舍利供養」）

小年は少年。綾、羅、錦という三文字を並べて華麗な織物を意味し、火、血、刀という三文字を並べて地獄の惨状を形容する。

綾羅錦者、眼前之色養也	綾羅錦というものは、眼前の色養なり
宜捨於中道之間	中道の間に捨てるべし
戒定恵者、身後之資糧也	戒定恵というものは、身後の資糧なり
将修（於）大法之肆	将に大法の肆に修す
	（卷五「女三位八講」）

同じく綾羅錦という三字連文を使用しているが、戒、定、恵という語も三字連文である。持戒、禪定、知恵をいうのであるが、いずれも仏教におけるいわゆる道諦の教えである。

六、五言詩句の挿入。

時時參山陵	時時に山陵を参し
-------	----------



念念覆腸胃

念念に腸胃を覆す

(巻五「呬三位千日講」)

「念」とは梵語刹那の音訳である。『維摩詰經』經文：「是身電如、念念不住」『敦煌變文校注』卷五「維摩詰經講經文」：「是身如電、念念不住」（この身は電の如き、念念が住まず）、『寒山詩』「可畏三界輪」：「可畏三界輪、念念未曾息」（畏る可し三界の輪、念念未だ曾て息まず）、などの例が挙げられる。

如幻如夢

幻の如き夢の如き

長夜本不還

長い夜にてもとに還らず

老也病也

老や病や

残日亦幾何

残される日亦幾何ぞ

(巻六「法華經三千部轉讀」)

七、「褊」の表現。ことに注意すべきは、匡房が愛用した「褊」という表現である。『大漢和辞典』や『漢語大詞典』など辞書によると、「褊」という語は（衣や土地や働きや度量など）せまい、きびしい、きみじかなどの意であるが、すべて匡房の願文の意にはあたらぬ。

『江都督納言願文集』において、「褊」は「宝」（貴ぶ、尊ぶ）との反対の意として使われる例がある。

陀羅賢劫、釈迦曠劫

陀羅賢の劫、釈迦曠の劫

多宝生盤龍之容

多くに生盤龍の容を宝ぶ

八大菩薩、四大聲聞

八の大菩薩、四の大聲聞

皆褊山鷄之舞

皆山鷄の舞を褊す

(巻三「左府室供養」)

「似」と相對して、比較の表現となる例もある。

母則神功皇后

母は則ち神功皇后なり

褊納日納月（之）孤夢

納日や納月の孤夢を褊す

子則仁徳天皇

子は則ち仁徳天皇なり

似文王武王之列聖

文王や武王の列聖に似る

(巻一「八幡御塔」)

また、「嫌」（嫌い）の同義の語として使われる例もある。

種智還年之藥

種智の還年の藥

嫌舟（丹か）龜於松喬

丹龜が松喬におけるのを嫌ふ

六度濟川之舟

六度の濟川の舟

褊錦纜於李郭

錦纜が李郭におけるのを褊す

(巻三「左大臣家平野建立堂願文」)

なお、「望」(望む)の対語として、使われる。

二十八品妙跡	二十八品の妙跡
還徧陰氏之三字	還えて陰氏の三字を徧す
千万億哀情	千万億の哀情
更望東閣之先飯	更に東閣の先飯を望む

(巻五「奉為故博陰殿室家被供養自筆法花経願文」)

だが、一番多いのは、「嫌」や「嘲」(嘲笑)に対し、やや軽視、軽蔑の意味が含まれている。

徧股網之一面	股網の一面を徧すことは
不如斷疑網	疑網を斷すに如かず
嫌金輪之四州	金輪の四州を嫌ふことは
奈何離苦輪。	奈何ぞ苦輪に離れん

(巻一「奉書寫金字経一部墨字経百部」)

仏道南司之一乗	仏道南司の一乗
嘲列子於旬日之風	列子旬日の風に於てするを嘲り
法水東漸之千帆	法水が東漸の千帆
徧范蠡於江湖之浪。	范蠡が江湖の浪に於てするを徧す

(巻二「前女御道子逆修願文」)

桃夭春濃	桃夭が春に濃い
嘲麗花於南陽之月	麗花南陽の月に於てするを嘲り
蕙問日新	蕙問が日に新にし
徧瓊芝於西晋之風。	瓊芝西晋の風に於てするを徧す

(巻二「法勝寺常行堂供養願文」)

重門高閣之甚幽	重門や高閣甚だしい幽なり
嘲燕昭之築台矣	燕昭の台を築くを嘲り
山川水上之信美	山川や水上信かに美なり
徧王祭(祭か)之登樓	王祭の樓に登るを徧す

(巻二「円徳院供養願文」)

億齡宝歴	億齡の宝歴
徧千齡於周夢	千齡周夢に於てするを徧す
万年玉体	万年の玉体

嘲百年於殷慶

百年殷慶に於てするを嘲る

(卷三「左大臣家平野建立堂願文」)

以上の例から見れば、匡房の願文における「徧」は、ほとんど動詞として、狭い、小さいの意から転じて、ちいさく見る、見下げる、軽蔑する、ばかにするなどの意として解釈してもよさそうである。しかし、匡房以前の文辞にはこうした意味合いで使った例は見当たらない。この「見下げる」の意の「徧」字は、六朝の方言ではないかと思う。

しかし、「徧」の対象として匡房が挙げたのは、けっして世間において評判の悪ったものではなく、かえって最高級な名誉の持ち主であった。このような表現は、「襯託」の手法を利用して願文に記された美を強調しようとするものである。つまり、「昔こんな評判のよかった事があったが、それに比べると願文中の事跡のほうがはるかに素晴らしい」といい、典故によって、願文の主の素晴らしさを際立たせる修辞法である。「徧」は「嘲」と同様、典故を否定的に用いている用語である。「文選」などに収録されたの六朝の辞賦においても、このような用法がなかったばかりでなく、今の辞書にもこのような意味は載せられていないが、匡房が新奇な表現をするために頻用したに違いない。

匡房の願文には、一方では対句などの辞賦の表現の多用が目立ち、一方では四言詩や五言詩の挿入が試みられるなど、「風騷之道」としての願文の性格に即して詩句の自由な使い分けが行われたことは、必然であったように思われてくる。彼の願文には仏教の詩語や故事と世俗的な詩語や故事が取り混ぜられていた。

### 筆記小説語

もともと「風騷之道」としての願文の条件として、たんに四六の対句を連ねるだけではなく、典拠のある表現を積極的に活用すべきことが要求される。匡房の願文も唐代の小説に由来する典故を数多く用い、そのことも願文に華麗な文体をもちいることを促しているのである。注目すべきは、楊貴妃の故事が、匡房の願文に頻用されることである。匡房の願文と楊貴妃に関する文学の関連について考察すれば、無視しえないのは、やはり白居易の「長恨歌」であろうが、これらの故事は、『明皇雜録』に載せているので、当時、『明皇雜録』などの楊貴妃にかかわる筆記小説が日本に伝来していたのではないかと考えられる。

唐の鄭処海作『明皇雜録』はすでに散佚してしまった部分があるが、『守山閣叢書』に収められているほか、『唐代叢書』や『太平広記』などにもその逸文が残されている。匡房の願文で巻二の「前女御道子逆修願文」に「玄都觀之瘦馬、賦羅衣而不歸」という句は、『明皇雜録』から李道士の詩をふまえた発想ではないかと推測される。

其末篇曰：

燕市人皆去、函関馬不歸。

若逢山下鬼、環上系羅衣。

「燕市人皆去」、祿山悉幽薊之衆而起也。「函関馬不帰」者、哥舒翰潼関之敗、匹馬不還也。「若逢山下鬼」者、馬嵬蜀中驛名也。「環上系羅衣」者、貴妃小字玉環。馬嵬時、高力士以羅巾縊之也。（『明皇雜録』卷下）（18）

その末篇は曰く。

燕市人皆な去り	函関馬帰らず
もし山下の鬼に逢わば	環上に羅巾を繫かん

「燕市人皆な去る」とは、安祿山が範陽の兵士をひきいて押し寄せてくること、「函関馬帰らず」とは、哥舒翰が潼関で破れること、「山下の鬼に逢う」とは「嵬」の字のこと、つまり馬嵬の駅を指す。「環上に羅巾を繫ぐ」とは、貴妃の小字が玉環であり、彼女に高力士が羅巾で手にかけることの意となる。

『江都督納言願文集』卷二「法勝寺常行堂供養」の後段、亡者の菩提祈願に李夫人、楊貴妃の故事をふまえる対句が有名である。

韶顔如在眼前	韶顔眼前に在すの如き
瑩金人而擬闍野之石	金人を瑩して闍野の石を擬し
嬌音絶於耳底	嬌音耳底に絶し
叩花鐘而代斜谷之鈴	花鐘を叩きて斜谷の鈴に代り

「斜谷之鈴」は玄宗が都を放棄して蜀に赴く途中、斜谷の栈道で長雨に会い、馬の鈴の音が雨とひびきあうのを聞いてますます楊貴妃を慕い、「雨霖鈴」の曲を作ったという故事にちなむ。この故事の出典について、よく『楊太真外伝』や「長恨歌」を挙げていたが、『明皇雜録』から出た可能性も否定できない。

明皇既幸蜀、西南行初入斜谷。屬霖雨涉旬。於栈道雨中聞鈴、音與山相應。上既悼念貴妃、採其聲為「雨霖鈴」曲、以寄恨焉。（『明皇雜録補遺』）

明帝、既に蜀に幸し、西南に行き、斜谷に入る。霖雨の旬に渉るに屬す。栈道中に於いて鈴聲と雨と相應ずるを聞く。明皇既に貴妃を悼念し、その聲を採り、「雨霖鈴」の曲を為り、以て恨みを寄す。

『江都督納言願文集』卷二「同（道子）女御丈六堂」に、次の句がある。

班婕妤霜扇之詞	班婕妤の霜扇の詞は
未銷一切之焰	一切の焰を銷ず
楊貴妃雪衣之興	楊貴妃の雪衣の興は
豈免八寒之氷	豈に八寒の氷を免れんや

「班婕妤の霜扇の詞」というのは、漢成帝の時、帝の寵愛を失ってしまった班婕妤が作った「怨歌行」（「怨歌」ともいう）を指しているが、「楊貴妃の雪衣の興」というのは、何を意味しているのか。『明皇雜録』の次の故事を読めば、匡房が、紛れもなく「雪衣女」という鸚鵡の死を思い浮かべたに相違ないことがわかる。

天宝中、嶺南献白鸚鵡、養之宮中、歳久頗聰慧、洞曉言詞。上及貴妃皆呼為雪衣女。性即馴擾、常縱其飲啄飛鳴、然亦不離屏幃間。上令以近代詞臣詩篇授之、數遍便可諷誦。上每與貴妃及諸王博戲、上稍不勝、左右呼雪衣孃、必入局中鼓舞。（上六字『六帖』には「即飛至將翼」とある。）以亂其行列、或啄嬪御及諸王手、使不能争道。

忽一日、飛上貴妃鏡台、語曰：「雪衣孃昨夜夢為鷲鳥所搏、將尽於此乎？」上使貴妃授以『多心經』、記誦頗熟、日夜不息、若懼禍難、有所禳者。上與貴妃出於別殿、貴妃置雪衣孃於步輦竿上、與之同去。即至、上命從官校獵於殿下、鸚鵡方戲於殿上、忽有鷹搏之而毙。上與貴妃嘆息久之、遂命瘞於苑中、為立冢、呼為鸚鵡冢。

（『明皇雜録逸文』、『事文類聚』後集四十。『六帖』九十四）

開元年間、嶺南から白鸚鵡が献上され、これを宮中で飼っていた。すこぶる頭がよく、いち早く人の言葉を覚えた。玄宗も貴妃も「雪衣女」と呼んでこれを可愛がっていた。人に馴れ、放しても御殿から出てゆくことがなかった。近代における詩人たちの作品を教えると、これもすぐにくりかえすことができた。玄宗が王たちと碁などを行っている時、局面が不利になると貴妃が雪衣女を呼ぶのがつねであった。雪衣女は飛んで来て、たちまちその羽根で局面を擾乱したり、王妃や諸王たちの手をついばんだり、勝負ができないようにしてしまった。

雪衣女はある日、貴妃の鏡台の上にとまっていった。「昨夜夢の中で鷹につかまえられてしまいました。命もはや尽きるのでしょうか」。玄宗はこれを聞いて楊貴妃に、この鳥に「多心経を教えてやるように」と告げた。貴妃が熱心に教えると、すぐに暗誦してしまって、まるで災難をのがれたい一心でもあるかのように日夜これを唱えていた。

ところがある日、貴妃が玄宗とともに別殿に出て、雪衣女を歩輦の竿の上にとまらせておくと、殿下で調教を受けていた鷹の一羽が突然飛来して雪衣女を襲い、食い殺してしまった。玄宗と楊貴妃はいたく悲しみ、雪衣女のために苑中に塚を立て「鸚鵡塚」と名づけた。

実際少しばかり注意すれば、楊貴妃と雪衣女の故事がやみくもに挿入されるのではなく、願文の無常の情調を盛り上げるためにそれなりの工夫が施されていることが分かるのである。そして、重要なのは、この句の悲しい情調が当時、もうすでによく知られていた「長恨歌」や楊貴妃と玄

宗皇帝の悲劇を効果的に引用していることである。

楊貴妃ばかりでなく、玄宗皇帝に関してもいろいろな故事がよく引用される。『江都督納言願文集』巻一「奉書寫金字經一部墨字經百部」に玄宗と音楽の故事を述べている。

重華聖主之倩琴、春風南息                      重華聖主の倩琴、春風が南に息し

玄宗皇帝之玉琯、秋月西藏                      玄宗皇帝の玉琯、秋月が西に藏す

『明皇雜録補遺』によると、玄宗は蜀から帰ってから、夜、高力士と月に乗じて勤政樓に登り、高力士や紅桃という貴妃の侍女に命じて「涼州詞」という歌を歌わせていた。その歌は、貴妃が作り、玄宗皇帝が自ら玉笛を吹いて調子を合わせた。曲がおわると、皆は涙をおさえた。玉琯、玉笛と同義とされる。『明皇雜録』などの筆記小説を匡房が読み、かつふまえていたことは当然想像される。

匡房が引用する漢籍や愛読書としては、『明皇雜録』や「長恨歌」が尤も注目される作品であろう。

以上の調査から、次の二点を指摘できる。

一、 渡来の俗文学の書は匡房の願文に新しい生気を与えたこと。その文字表現にこれらの材料によったものもかなり多く、われわれの看過しやすい点にも俗文学がひそんでいる。

二、 匡房の願文にはこのように、『明皇雜録』から引いた典故や言葉と思われる句がさしはさまれたり、唐玄宗や楊貴妃にかかわると推測される語句が混在している場合が見られる。これは、玄宗と貴妃に関する筆記小説が『白氏文集』とともに平安時代の日本に伝来されたり、人々に愛読されたりしたことの証拠でもある。

願文を考えるうえに、実に『江都督納言願文集』ほど多様で完全な願文集は他に存在しないと思う。作者である大江匡房のなみなみならぬ学識と「風騷」に対する情熱に改めて敬意を示すものである。かつて、従来無視されて来た『江都督納言願文集』について、まとまった研究を發表されたのは、小峰和明氏であったことは周知の所である(19)。しかしながら、その發表が、今から十年も前であったことと、近年の願文や俗語に対する研究が、急速な進歩を遂げたことと相俟って再考を要することも、また否定できない。

- (1) 六地藏寺善本叢刊 『江都督納言願文集』、汲古書院、昭和五十九年。
- (2) 蔣礼鴻著、『敦煌變文字義通釈 増補定本』、上海古籍出版社、1997年、P.266—268。
- (3) 顧野王著、『大広益会玉篇』、中華書局、2004年、P.26。
- (4) 釈慶滋編、『諷誦、歎徳、表白、引導大宝典』、国書刊行会、昭和59年、P.248。
- (5) 黄征、張湧泉校注、『敦煌變文校注』、中華書局、1997年。
- (6) 魏耕原著、『全唐詩語詞通釈』、中国社会科学出版社、2001、P.2。
- (7) 王梵志著、項楚校注、『王梵志詩校注』、上海古籍出版社、1991年。
- (8) 塩見邦彦、「唐詩俗語新考」、『白川静博士古稀記念中国文史論叢』、立命館大学文学会。
- (9) 久須本文雄、『座右版 寒山拾得』、講談社、1999年。
- (10) 杉本つとみ編、『異体字研究資料集成』 一期別巻、平成七年。
- (11) 八木沢元、『遊仙窟全講』、明治書院、昭和61年。
- (12) 孔凡礼点校、『墨莊漫録 過庭録 可書』 中華書局、2004年、P.102。
- (13) 李劍国輯校、『宋代傳奇集』、中華書局、2001年。P.491—493。
- (14) 徐時儀著、『玄応「衆経音義」研究』、中華書局、2005年、P.483。
- (15) 任半塘編、『敦煌歌辞総編』、上海古籍出版社、1987年。P.502。
- (16) 黄征著、「三字連文論析」、『敦煌語言文字学研究』、甘肅教育出版社、2002年、P.224—227。
- (17) 黄征、張湧泉校注、『敦煌變文校注』、中華書局、1997年。
- (18) 丁如明、李宗為、李学穎等校注、『唐五代筆記小説大観』(全二冊)、上海古籍出版社、2000年、下、P.951—980。
- (19) 小峰和明、「願文・表白を中心に」、白居易研究講座第四卷『日本における受容(散文篇)』、勉誠社、平成6年、P.143—162。など。